

論文の和文要旨

論文題目	赤松要の雁行形態論とその展開 — 在名古屋時代と段階論的視座
氏名	大槻 忠史

本稿の目的は、赤松要(1896-1974)が名古屋高等商業学校(現、名古屋大学経済学部)及び同校附設機関である産業調査室(現、同大学大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター)において、1930年代前半から半ばにかけてその着想を得、同後半に展開を進めた雁行形態論(雁行形態的発展論)の着想から形成、展開過程を考察することにある。

これまで、赤松の雁行形態論は、日本のみならず1960年代以降には世界でも‘Wild-Geese-Flying Pattern Theory’や‘Flying-geese pattern theory’の名前で知られるようになり、現在に至るまで引用・検討されてきた。またこれらと共に、赤松の弟子である小島清(1920-2010)らによって雁行形態論の精緻化が試みられてきた。そして2008年には、池尾愛子による赤松の最初の評伝が刊行された。

しかしながら、赤松の提唱した雁行形態論そのものの着想や展開過程についての研究は、十分とは言い難い。赤松が同論の着想を得るきっかけには、日本における羊毛工業の発展に対する歴史的分析があり、また、この分析に際しては、彼が留学に際してハーヴァード大学で視察を行った経験分析法があった。そして同時に、赤松の理論展開に際しては、綜合弁証法がその支柱にあった。

同時期に赤松は、先のような経験分析を通じて、雁行形態論と共に、世界経済の「異質化」と「同質化」の理論についてもその着想を得、展開をすすめていた。しかし同論についても雁行形態論と同様に、それ自体についてはほとんど考察の対象とはならなかった。このため、赤松が主張したこれら2つの学説の関係性についても、指摘・分析されること

がほとんどなかった。

本稿では、赤松の留学、そしてその成果としての経験分析に対して考察を進め、彼が展開した学説の着想から形成、展開を考察していく。そしてこのような考察を通じて、赤松のこれら学説には、発展段階論の視座を有することが明らかとなる。このため、本稿では F. リスト(Friedrich List: 1789-1846)や W.W. ロストウ(Walt Whitman Rostow: 1916-2003)らによる段階論を取り上げ、発展段階論の視座から赤松の学説を考察する。

以上のような目的を持つ本稿は、第 1 部「雁の誕生そして旅立ち」、「雁の小休止としての中間地」、第 2 部「雁の再飛行とさらなる広がり」、及び補論という全 4 部から構成されている。

第 1 部では、次のような構成(全 8 章)で、赤松の提唱した雁行形態的発展論の着想から形成そして展開過程を考察する。

第 1 章では、高等教育課程としての商業教育の展開を概観すると共に、その中で赤松が在職した名古屋高等商業学校がおかれる位置についてみておく。

第 2 章では、同校の教育及び研究の拡充過程について考察を進める。同校の教育及び研究環境の整備に際しては、多くの点で赤松が先導的役割を果たしており、かつまた、本稿が対象とする赤松の学説展開は、同校での研究過程から着想を得たものである。このため、名古屋高等商業学校の教育及び研究環境を取り上げることは、赤松の学説展開を考察する上で有効といえる。

第 3 章では、赤松が雁行形態論の着想を得ることになった日本における羊毛工業の発展に対する分析が持つ意味について、次のような 2 つの観点から考察を行う。1 つ目は、日本の工業化、そして 2 つ目は愛知県尾西地方の地場産業という側面である。これら 2 つの観点からの考察によって、赤松がなぜ羊毛産業を分析の対象として選択したのかが明らかとなる。

第 4 章では、雁行形態論の形成過程について考察する。また同章では、形成過程とともに、雁行形態論が赤松の理論的支柱である弁証法によってどのような説明・解釈を与えられたのかについて、彼の論考によりながら考察を進める。

第 5 章では、羊毛工業の分析、とりわけ歴史的分析を通じて赤松が雁行形態論と共に着想を得ることになった世界経済の「異質化」と「同質化」の理論について、概念的及び実証的側面から考察を進める。赤松は、1932 年に世界経済の「異質化」と「同質化」の理論に関する論考を初めて発表した後、1930 年代半ば以降には長期波動学説の枠組みを援用しながら、さらに学説を展開していく。そしてその際に彼が参照したのが、H. Д.コンドラチエフ(Николай Дмитриевич Кондратьев: 1892-1938)による大循環に関する学説であった。そこで、赤松の学説展開に対して考察を進める前に、第 6 章ではコンドラチエフが主張した大循環学説について考察を加えておく。またこれと共に、第 7 章において、日本における大循環、長期波動学説の受容と反応について概観をえることにしたい。これによって、1930 年代当時の日本では、コンドラチエフの大循環学説に対しては批判的検討にとどまった論

者が多い中で、赤松がどのように同学説を捉えたのかが明らかとなる。

第8章では、第6及び7章での考察を踏まえ、赤松が世界経済の「異質化」と「同質化」の理論の中にどのように長期波動の学説を組み込み、さらなる展開を示していったのかについて考察を進める。そしてまた雁行形態論の場合と同様に、この世界経済の「異質化」と「同質化」の理論についても、赤松の総合弁証法による解釈を試みる。

以上のような第1部での考察を通じ、雁行形態論及び世界経済の「異質化」と「同質化」の理論についての着想から形成過程そして展開が明らかになると共に、これら学説が発展段階論としても位置づけられることが分かる。そしてまた同時に、次のような点も明らかとなる。即ち、赤松を中心として行われたこのような研究は、経済学の学理研究と愛知県さらには日本の実態経済分析とを結びつけたという点において、高等商業学校がその役割として、地元名古屋そして日本の経済活動の発展に寄与していたということである。

第1部及び、後述する補論での赤松の経歴(とりわけ第2次世界大戦後)に対する考察から分かるように、名古屋高等商業学校在職時及び戦後における赤松の活動は研究、教育いずれの活動に対しても積極的であった。しかし、これらの時期とは対照的に、東京商科大学(現、一橋大学)への転任の頃から戦後新制一橋大学の教壇に復帰する頃にかけての赤松は、教育活動に携わることはほとんど無く、また研究活動に関しても、赤松にとってその持つ意味が大きく異なっていた。とりわけ時局の悪化、またこれに伴い南方調査への参加が決定する頃になると、赤松はその団長として時局に応じた対応をするようになる。

そこで本稿では、「雁の小休止としての中間地」を設け、名古屋高等商業学校から東京商科大学への転任期、そして南方調査への参加期の赤松の活動を取り上げることによって、赤松にとって両時期それぞれの研究(また教育)活動が持つ意味・影響について考察を行うことにしたい。

中間地を経て、第2部(全3章)では、第1部で明らかにされる発展段階論としての赤松学説の展開という観点から、発展段階論に関して、第10章ではF. リストを、第11章ではコンドラチエフを、そしてさらに第12章ではW. W.ロストウ及びA. ガーシェンクロン(Alexander Gerschenkron; Александр Гершенкрон: 1904-1978)を中心とした論者を取り上げ、考察を進める。

彼らの中でもとりわけリストの学説に関しては、赤松のそれよりも以前に展開されたものであって、かつまた赤松がドイツに留学していたことも重なり、これまで、赤松学説の独自性を巡る議論も提示された。そこで第10章では、リストの段階論に対して考察を進めると共に、赤松学説との独自性を巡る議論についても考察を加えておくことにしたい。

また第11章で取り上げるコンドラチエフに関しては、第1部で示すように、赤松は彼が1920年代を中心に展開した大循環学説の枠組みを参照していた。他方で、コンドラチエフは大循環の学説を展開した頃、彼はまた農政学者としてロシアの農業発展計画の立案を行っていた。そして彼が示した発展プランには、段階的な見方を指摘することができる。管見の限りでは、赤松の著作・論考の中にこれらに関するコンドラチエフの考えを紹介・検

討した箇所を見出すことはできない。しかしながら、赤松とコンドラチエフの系譜関係をめぐって、大循環、長期波動論のみならず、今後さらに発展に関する段階的見方についても考察を進める上で、本章での考察は有益なものとなるであろう。

そして第12章では、第二次世界大戦後の1950-1960年代を中心にロストウによって展開された発展段階のシエーマ及び、ロストウの学説に異を唱えたガーシェンクロンを取り上げる。同時期には、第三世界諸国の発展を背景に、段階論に関する議論がさらにさかんになるとともに、他方ではその限界性が指摘されるようにもなった。本章では、両者の学説に対して考察を進めるとともに、今後、さらに発展段階論についての体系的な研究を進める上での手がかりを得ることにしたい。

以上のような本論に加え、本稿では補論(全2章)を設けている。第1章では、オランダのS.デ・ヴォルフ(Salomon de Wolff: 1878-1960)が主張した大循環論について考察を進める。デ・ヴォルフは、1924年に発表した論考「繁栄期と不況期」によってコンドラチエフと共に大循環の研究者として知られてきた。このデ・ヴォルフの研究に関しては、コンドラチエフがその存在に言及したこともあって、1930年代初頭の日本においても既に知られていたものの、当時の日本では二次文献を介した紹介にとどまっていた。また現在でも、いくつかの研究があるものの、二次文献に拠る研究が多い。またこれと併せて、彼の経歴を含めて研究はほとんど知られていない。そこで補論1.では、デ・ヴォルフの経歴及び大循環研究について考察を進める。

そして続く補論2.では、赤松の経歴を辿り、彼の学問的背景を中心として考察を進めることにしたい。とりわけここでは、神戸高等商業学校(現、神戸大学)及び東京高等商業学校(現、一橋大学)在学時代、名古屋高等商業学校への着任と同校での活動、そして戦後の彼の活動に焦点を当てる。ここでの考察から、学生時代から教師時代を通じた赤松の活動の背景に存在した学問的関心とその展開が明らかとなる。

以上のような考察を通じて、赤松の雁行形態論及び世界経済構造の「異質化」と「同質化」の理論について、その着想から展開までの過程が明らかにされると共に、発展段階論としてのその視座が示される。